

2D-7

マルチプロセッサシステムにおける 多段先行評価制御手順

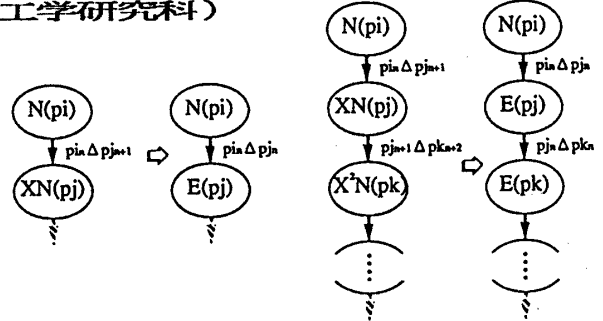
石井吉彦 安江俊明 山名早人 村岡洋一
e-mail:harray@muraoka.info.waseda.ac.jp
(早稲田大学 理工学研究科)

1. はじめに

本稿では、マルチプロセッサシステムにおける、タスク一段の先行評価の制御(一段先行評価制御)と、タスク多段に渡る先行評価の制御(多段先行評価制御)との違いについて述べる。

我々は、一段先行評価制御、及び、多段先行評価制御を具体的なマルチプロセッサシステム(並列処理システム-晴- [1])に沿って提案してきた[2][3]。

本稿では、一段先行評価制御、及び、多段先行評価制御を時相論理で表現し一般化する。その後、この時相論理を用いて、制御の違いを推論する。また、この推論によって、我々が提案してきた具体的なマルチプロセッサシステムに沿った一段先行評価制御、及び、多段先行評価制御の正当性を述べる。



(a)一段先行評価制御 (b)多段先行評価制御
図1 先行評価制御

2. 一段先行評価制御, 多段先行評価制御

要素プロセッサを $p \in P$ (P : 要素プロセッサ全体), タスクを $t \in T$ (T : タスク全体) で表す。 P の各要素プロセッサ p に、それぞれ T の1つのタスク t が割り当てられているとき、この対応を S で表し、 P から T への写像 ($S: P \rightarrow T$) といひ、 $S(P) = \{S(p): p \in P\}$, $S^{-1}(T) = \{p: S(p) \in T\}$ で表す。

本稿では、マクロブロックをタスクとしたマルチプロセッサシステムを想定しているため、 $S(p)=t$ は全射(上への写像)であり、単射ではない。

また、要素プロセッサ p に割り当てられているタスクの時系列が、 $\{t_1, t_2, \dots, t_n, \dots, t_n \in T\}$ で表されるとき、 n を t_n の世代といひ、世代 n において、要素プロセッサ p にタスク t_n が割り当てられていることを、 $S_n(p)=t_n$ で表す。従って、

$$\forall n \forall t_n \in T \exists p \in P \{S_n(p)=t_n\}$$

が成り立つ。

また、要素プロセッサ p に割り当てられているタスクの処理状態には、先行評価と非先行評価の2つがあり、

命題 $E(p)$: 「要素プロセッサ p はタスクを先行評価で処理」

命題 $N(p)$: 「要素プロセッサ p はタスクを非先行評価で処理」

で表す。このとき、

$$E(p)' = N(p)$$

が成り立つ。

また、世代 n のタスク t_n から世代 m のタスク t_m への制御依存があるとき、この制御依存を $t_n \delta t_m$ で表す。なお、マルチプロセッサシステムにおいて(非先行評価では)制御依存 $t_n \delta t_m$ の世代 n, m は計算順序を保証するため、 $n < m$ を満たさなければならない。従って、 m が最小になるようにスケジューリングすると $m=n+1$ となる。

本稿では、便宜上、

$$\forall n \exists t_n, t_{n+1} \in T \{t_n \delta t_{n+1}\} \exists p_i, p_j \in P \{S_n(p_i)=t_n, S_{n+1}(p_j)=t_{n+1}\}$$

を $p_i \Delta p_j$ で表す。なお、「 m が最小になるようにスケジューリングする」とは、

$$p_i \Delta p_j \rightarrow p_i \Delta p_{j+1} \quad (n < m) \quad \text{式(1)}$$

のことである。

以上より、一段先行評価制御を表す命題 $SE(p_i, p_j)$ は、

$$p_i \Delta p_{j+1} \wedge N(p_i) \wedge XN(p_j) \wedge p_i \neq p_j \rightarrow p_i \Delta p_j \wedge N(p_i) \wedge E(p_j) \quad \text{式(2)}$$

で表される。(図1(a)参照)

一方、多段先行評価制御を表す命題 $ME(p_i, p_j, p_k, \dots)$ は、

$$p_i \Delta p_{j+1} \Delta p_{k+2} \Delta \dots \wedge N(p_i) \wedge XN(p_j) \wedge X^2N(p_k) \wedge \dots \wedge \forall \alpha, \beta \in \{1, j, k, \dots\} \{p_\alpha \neq p_\beta\} \rightarrow p_i \Delta p_j \Delta p_k \Delta \dots \wedge N(p_i) \wedge E(p_j) \wedge E(p_k) \wedge \dots \quad \text{式(3)}$$

で表される。(図1(b)参照)

本稿で明らかにしたいのは、一段先行評価制御 $SE(p_i, p_j)$ と多段先行評価制御 $ME(p_i, p_j, p_k, \dots)$ との制御の違いである。仮に、

$$ME(p_i, p_j, p_k, \dots) = SE(p_i, p_j) \wedge SE(p_j, p_k) \wedge \dots$$

が成り立てば、制御の違いは存在しない。

以下、2.1では、一段先行評価制御 $SE(p_i, p_j)$ を恒真命題としたときの制御の違いを述べ、2.2では、逆に、多段先行評価制御 $ME(p_i, p_j, p_k, \dots)$ を恒真命題としたときの制御の違いを述べる。2.3では、2.1の制御と2.2の制御を比較する。

2.1 恒真命題, 一段先行評価制御 $SE(p_i, p_j)$

いま、一段先行評価制御 $SE(p_i, p_j)$ を恒真命題としたときの、制御の違いを表す命題を $Q(p_i, p_j, p_k, \dots)$ とすると、

$$\forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{SE(p_i, p_j) \wedge SE(p_j, p_k) \wedge \dots\} \exists Q(p_i, p_j, p_k, \dots) \{ME(p_i, p_j, p_k, \dots) \wedge Q(p_i, p_j, p_k, \dots) = SE(p_i, p_j) \wedge SE(p_j, p_k) \wedge \dots\} \quad \text{付録(1)より,}$$

$$\Rightarrow \forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{SE(p_i, p_j) \wedge SE(p_j, p_k) \wedge \dots\} \exists Q(p_j) \{E(p_j) \wedge Q(p_j) = N(p_j)\} \wedge \exists Q(p_k) \{E(p_k) \wedge Q(p_k) = N(p_k)\} \wedge \dots$$

$$\Rightarrow \forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{SE(p_i, p_j) \wedge SE(p_j, p_k) \wedge \dots\} N(p_j) \wedge N(p_k) \wedge \dots \wedge \exists Q(p_j) \{E(p_j) \wedge Q(p_j) = N(p_j)\} \wedge \exists Q(p_k) \{E(p_k) \wedge Q(p_k) = N(p_k)\} \wedge \dots$$

$$\Leftrightarrow \forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{SE(p_i, p_j) \wedge SE(p_j, p_k) \wedge \dots\} E(p_j)' \wedge E(p_k)' \wedge \dots \wedge \exists Q(p_j) \{E(p_j) \wedge Q(p_j) = N(p_j)\} \wedge \exists Q(p_k) \{E(p_k) \wedge Q(p_k) = N(p_k)\} \wedge \dots$$

$$\Leftrightarrow \forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{SE(p_i, p_j) \wedge SE(p_j, p_k) \wedge \dots\} \exists Q(p_j) \{E(p_j) \wedge Q(p_j) \rightarrow N(p_j)\} \wedge \exists Q(p_k) \{E(p_k) \wedge Q(p_k) \rightarrow N(p_k)\} \wedge \dots$$

が成り立つ。

この制御の違いを表す命題 $Q(p_i, p_j, p_k, \dots)$ の存在は、「多段先行評価制御 $ME(p_i, p_j, p_k, \dots)$ において、本来、タスクを先行評価で処理している p_j, p_k, \dots を、非先行評価で処理しているときみなせば、式(2)で示した一段先行評価制御 $SE(p_i, p_j)$, $SE(p_j, p_k), \dots$ がそのまま適用できること」を意味している。(図2(a)参照)

2.2 恒真命題, 多段先行評価制御 $ME(p_i, p_j, p_k, \dots)$

いま、多段先行評価制御 $ME(p_i, p_j, p_k, \dots)$ を恒真命題としたときの、制御の違いを表す命題を $R(p_i, p_j, p_k, \dots)$ とすると、

$$\forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{ME(p_i, p_j, p_k, \dots)\} \exists R(p_i, p_j, p_k, \dots) \{ME(p_i, p_j, p_k, \dots) = SE(p_i, p_j) \wedge SE(p_j, p_k) \wedge \dots \wedge R(p_i, p_j, p_k, \dots)\} \quad \text{付録(2)より,}$$

$$\Rightarrow \forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{ME(p_i, p_j, p_k, \dots)\} \exists R(p_j) \{E(p_j) = N(p_j) \wedge R(p_j)\} \wedge \exists R(p_k) \{E(p_k) = N(p_k) \wedge R(p_k)\} \wedge \dots$$

$$\Rightarrow \forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{ME(p_i, p_j, p_k, \dots)\} E(p_j) \wedge E(p_k) \wedge \dots \wedge \exists R(p_j) \{E(p_j) = N(p_j) \wedge R(p_j)\} \wedge \exists R(p_k) \{E(p_k) = N(p_k) \wedge R(p_k)\} \wedge \dots$$

$$\Leftrightarrow \forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{ME(p_i, p_j, p_k, \dots)\} N(p_j)' \wedge N(p_k)' \wedge \dots \wedge \exists R(p_j) \{E(p_j) = N(p_j) \wedge R(p_j)\} \wedge \exists R(p_k) \{E(p_k) = N(p_k) \wedge R(p_k)\} \wedge \dots$$

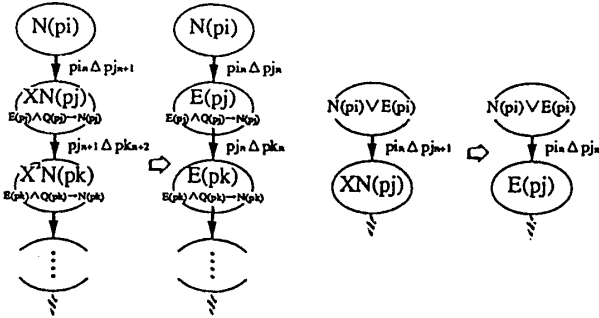
$$\Leftrightarrow \forall p_i, p_j, p_k, \dots \in P \{ME(p_i, p_j, p_k, \dots)\} \exists R(p_j) \{E(p_j) \leftarrow N(p_j) \wedge R(p_j)\} \wedge \exists R(p_k) \{E(p_k) \leftarrow N(p_k) \wedge R(p_k)\} \wedge \dots$$

が成り立つ。

この制御の違いを表す命題 $R(p_i, p_j, p_k, \dots)$ の存在は、「一

段先行評価制御SE(pj, pk), SE(pk, pl), ...において, 本来, タスクを非先行評価で処理しているpj, pk, ...を, 先行評価で処理しているとみなせば, 式(3)で示した多段先行評価制御ME(pi, pj, pk, ...)がそのまま適用できること」を意味している。しかし, 一段先行評価制御SE(pi, pj)では式(2)が成り立つ。従って, 式(2)で示した一段先行評価制御を表す命題SE(pi, pj)は,

$$\{N(pi) \vee E(pi)\} \wedge XN(pj) \wedge pi \neq pj \rightarrow pi \Delta pj_n \wedge \{N(pi) \vee E(pi)\} \wedge E(pj) \quad \text{式(4)}$$



(a)恒真命題, 一段先行評価制御 (b)恒真命題, 多段先行評価制御
図2 制御の違い

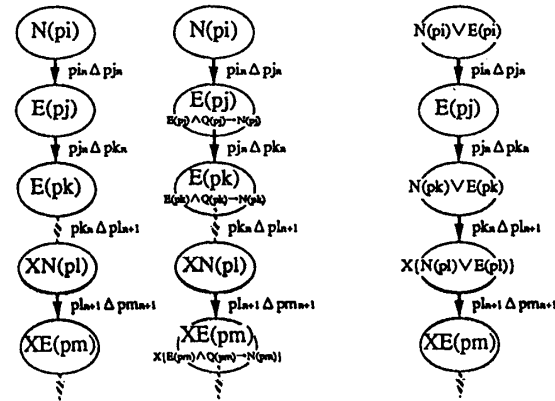
2.3 2.1の制御と2.2の制御との比較

二段先行評価制御と一段先行評価制御を組み合わせた制御を図3(a)に示す。

図3(a)に2.1の制御を適用すると図3(b)となり, 「二段先行評価制御でE(pk) ∧ Q(pk) → N(pk)が成り立つ(pkが先行評価から非先行評価になる)とき, 制御依存pk_n Δ pl_{n+1}によりpkからplに制御依存情報が放送され, 次世代の一段先行評価制御に制御が移ること」を示している。E(pk) ∧ Q(pk) → N(pk)が成り立つかどうかといった制御が追加されるため, 2.1の制御にはオーバーヘッドがある。しかし, pkが先行評価から非先行評価にならないときには, pkからplに制御依存情報が放送されないため, plの計算機資源を消費しない。そのため, 2.1の制御には計算機資源の無駄がない。

一方, 図3(a)に2.2の制御を適用すると, 式(4)より, 図3(c)となり, 「二段先行評価制御でN(pk) ∨ E(pk)が成り立つとき, 制御依存pk_n Δ pl_{n+1}によりpkからplに制御依存情報が放送され, 次世代の一段先行評価制御に制御が移ること」を示している。N(p) ∨ E(p)は恒真命題なので, N(pk) ∨ E(pk)といった制御は削除されるため, 2.2の制御にはオーバーヘッドがない。しかし, pkが先行評価から非先行評価にならない(次世代の一段先行評価制御に制御が移ることはない)ときにも, pkからplに制御依存情報が放送され, plの計算機資源を消費する。そのため, 2.2の制御には計算機資源の無駄がある。

我々が開発している並列処理システム-晴-は, 制御による計算機資源の無駄が許されるほど計算機資源が多くないマルチプロセッサシステムである。そのため, -晴-では, 2.1の制御を用いて, 一段先行評価制御, 多段先行評価制御を具現化している。しかし, 制御による計算機資源の無駄が許されるほど計算機資源が多いマルチプロセッサシステム(超並列処理システム)では, 制御のオーバーヘッドを考慮して, 2.2の制御を用いるべきである。



(a) 2.1の制御の適用 (b) 2.1の制御の適用 (c) 2.2の制御の適用
図3 二段先行評価制御と一段先行評価制御の組み合わせ制御

3. おわりに

本稿では, 一段先行評価制御, 及び, 多段先行評価制御を時相論理で表現し一般化した。その後, この時相論理を用いて, 制御の違いは, 「先行評価を非先行評価とみなすこと」, または, 「非先行評価を先行評価とみなすこと」と推論した。前者の制御の違いの, 先行評価制御の組み合わせへの適用では, 制御にオーバーヘッドがあるが, 計算機資源の無駄がない。一方, 後者の制御の違いの適用では, 制御にオーバーヘッドがないが, 計算機資源の無駄がある。我々が開発している並列処理システム-晴-では, 制御による計算機資源の無駄が許されないため, -晴-の一段先行評価制御, 多段先行評価制御は前者の制御の違いを用いて具現化している。

謝辞

本研究の遂行にあたり, 数々の御助言を頂いた本研究室の石崎一明氏, 及び, 萩本猛氏をはじめとする-晴-グループの皆さんに感謝致します。

参考文献

- [1] H. Yamana, et al.: "Parallel Processing System -Harray-", Computing System in Engineering Vol.1, No.1, pp.111-130(1990)
- [2] 石崎他: "並列処理システム-晴-の要素プロセッサ制御方式", 第42回情処全大, 4H-2(1991)
- [3] 石井他: "並列処理システム-晴-における要素プロセッサ制御手順", 第43回情処全大, 4Q-1(1991)

付録(1) $ME(pi, pj, pk, \dots) \wedge Q(pi, pj, pk, \dots) = SE(pi, pj) \wedge SE(pj, pk) \wedge \dots$

$$\Leftrightarrow \{pi_n \Delta pj_{n+1} \Delta pk_{n+2} \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge XN(pj) \wedge X^2N(pk) \wedge \dots \wedge \forall \alpha, \beta \in i, j, k, \dots \{p\alpha \neq p\beta\} \rightarrow pi_n \Delta pj_n \Delta pk_n \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge E(pj) \wedge E(pk) \wedge \dots\} \wedge Q(pi, pj, pk, \dots) = \{pi_n \Delta pj_{n+1} \wedge N(pi) \wedge XN(pj) \wedge pi \neq pj \rightarrow pi_n \Delta pj_n \wedge N(pi) \wedge E(pj)\} \wedge \{pj_n \Delta pk_{n+1} \wedge N(pj) \wedge XN(pk) \wedge pj \neq pk \rightarrow pj_n \Delta pk_n \wedge N(pj) \wedge E(pk)\} \wedge \dots$$

$$\Leftrightarrow \{pi_n \Delta pj_{n+1} \wedge N(pi) \wedge XN(pj) \wedge pi \neq pj \rightarrow pi_n \Delta pj_n \wedge N(pi) \wedge E(pj)\} \wedge \{pi_n \Delta pj_n \Delta pk_{n+2} \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge E(pj) \wedge X^2N(pk) \wedge \dots \wedge \forall \alpha, \beta \in i, j, k, \dots \{p\alpha \neq p\beta\} \rightarrow pi_n \Delta pj_n \Delta pk_n \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge E(pj) \wedge E(pk) \wedge \dots\} \wedge Q(pi, pj, pk, \dots) = \{pi_n \Delta pj_{n+1} \wedge N(pi) \wedge XN(pj) \wedge pi \neq pj \rightarrow pi_n \Delta pj_n \wedge N(pi) \wedge E(pj)\} \wedge \{pj_n \Delta pk_{n+1} \wedge N(pj) \wedge XN(pk) \wedge pj \neq pk \rightarrow pj_n \Delta pk_n \wedge N(pj) \wedge E(pk)\} \wedge \dots$$

式(1)より,

$$\Leftrightarrow \{pi_n \Delta pj_n \Delta pk_{n+1} \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge E(pj) \wedge XN(pk) \wedge \dots \wedge \forall \alpha, \beta \in i, j, k, \dots \{p\alpha \neq p\beta\} \rightarrow pi_n \Delta pj_n \Delta pk_n \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge E(pj) \wedge E(pk) \wedge \dots\} \wedge Q(pi, pj, pk, \dots) = \{pj_n \Delta pk_{n+1} \wedge N(pj) \wedge XN(pk) \wedge pj \neq pk \rightarrow pj_n \Delta pk_n \wedge N(pj) \wedge E(pk)\} \wedge \dots$$

$$\Rightarrow \{E(pj) \wedge E(pk) \wedge \dots\} \wedge Q(pi, pj, pk, \dots) = \{N(pj) \wedge N(pk) \wedge \dots\}$$

$$\Leftrightarrow \{E(pj) \wedge Q(pj) = N(pj)\} \wedge \{E(pk) \wedge Q(pk) = N(pk)\} \wedge \dots$$

∴ Q(pi, pj, pk, ...) は pj, pk, ... に対して独立

付録(2) $ME(pi, pj, pk, \dots) = SE(pi, pj) \wedge SE(pj, pk) \wedge \dots \wedge R(pi, pj, pk, \dots)$

$$\Leftrightarrow \{pi_n \Delta pj_{n+1} \Delta pk_{n+2} \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge XN(pj) \wedge X^2N(pk) \wedge \dots \wedge \forall \alpha, \beta \in i, j, k, \dots \{p\alpha \neq p\beta\} \rightarrow pi_n \Delta pj_n \Delta pk_n \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge E(pj) \wedge E(pk) \wedge \dots\} = \{pi_n \Delta pj_{n+1} \wedge N(pi) \wedge XN(pj) \wedge pi \neq pj \rightarrow pi_n \Delta pj_n \wedge N(pi) \wedge E(pj)\} \wedge \{pj_n \Delta pk_{n+1} \wedge N(pj) \wedge XN(pk) \wedge pj \neq pk \rightarrow pj_n \Delta pk_n \wedge N(pj) \wedge E(pk)\} \wedge \dots \wedge R(pi, pj, pk, \dots)$$

$$\Leftrightarrow \{pi_n \Delta pj_n \Delta pk_{n+2} \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge E(pj) \wedge X^2N(pk) \wedge \dots \wedge \forall \alpha, \beta \in i, j, k, \dots \{p\alpha \neq p\beta\} \rightarrow pi_n \Delta pj_n \Delta pk_n \Delta \dots \wedge N(pi) \wedge E(pj) \wedge E(pk) \wedge \dots\} = \{pj_n \Delta pk_{n+1} \wedge N(pj) \wedge XN(pk) \wedge pj \neq pk \rightarrow pj_n \Delta pk_n \wedge N(pj) \wedge E(pk)\} \wedge \dots \wedge R(pi, pj, pk, \dots)$$

$$\Rightarrow \{E(pj) \wedge E(pk) \wedge \dots\} = \{N(pj) \wedge N(pk) \wedge \dots\} \wedge R(pi, pj, pk, \dots)$$

$$\Leftrightarrow \{E(pj) = N(pj) \wedge R(pj)\} \wedge \{E(pk) = N(pk) \wedge R(pk)\} \wedge \dots$$

∴ R(pi, pj, pk, ...) は pj, pk, ... に対して独立